

あいだ』は、そんな気がかりにおおきな光明を与えてくれた。私の貧しい経験の範囲内ではあるけれど、分子レベルで生活実態を捕らえるという難問に、ここまですんなり答えてくれた本はあまりない。

DNA やタンパク質のふるまいについて書かれた本を、これまでも何冊か読んだ覚えがあるが、たいていはただ「仕組み」を説明したものだ。た。「なるほどそうか」とわかる部分がある。しかし、それ(例えばDNAの情報によって自己複製を行うタンパク質の姿)が、私たちの生活実態とどんな風に結びついているのか、という問題になると、厳密な科学の論述が私には突然おとぎ話に聞こえてしまうのが常であった。

本書は私たち人間を含め生き物たちが「分子を食べる」ことによって、その分子をどう処理しているのか、というまことに日常的なレベルで、アミノ酸やタンパク質の「ふるまい」を説明してくれている。それと同時に、DNAの二重らせん構造の発見という一大イベントの背景にあった研究の歴史と、その研究を支えていた思想に焦点を当てることによって、著者自身が行き着いた「生き物の定義」までの道筋を丁寧に追っている。著者は「生命体とはミクロなパーツからなる精巧なプラモデル、すなわち分子機械にすぎない」といった分子生物学の生命観に抗って、生命をあくまでも時間軸のなかで分解と生成を繰り返す「動的な平衡状態」ないしは「流れ」そのものとして定義しようとしているの

だが、この流れの主人公である原子や分子のふるまいが私のような素人にもよくわかるように説明されていて、思わず嬉しくなった。

その昔デモクリトスは、知性と感覚を論争させて次のように言わせた。知性いわく「表面上は色がある、表面上は苦味がある、しかし実のところ原子と空虚あるのみ」と。これに応酬して感覚いわく「おろかな知性よ、われらからおまえの論拠を借りてなお、われらに打ち勝とうと望むのか。お前の勝利は、お前の敗北」と。これは、本書『生物と無生物のあいだ』にも登場する物理学者エルヴィン・シュレティンガーが、観察に基づいて打ち立てられた理論には対象となることからの感覚的性質を説明する力がないという、認識における一種のジレンマについて述べた際に引用した言葉だ(中村量空訳『精神と物質』、工作舎、1987年、pp.153-154)。

確かに私たちは、主観的だとされる感覚と、客観的だとされる知識のジレンマからなかなか抜け出すことができない。しかし、もしこの宇宙のありとあらゆる原子のふるまいが、たまたま「私」という身体として形成され秩序を作り、かつこの形成されたと思われている秩序＝身体は、じつは分解と生成をくり返しながたえず分子レベルで交換されている、つまり「私」であった身体は一時として同じところにとどまてはいない、ということになれば「私」の感覚もまた、分子の運動の特異な秩序と考えることができるのかも知れない。

宮島 喬／若松邦弘／小森宏美・編

『地域ヨーロッパ——多層化・再編・再生——』(人文書院、2007年11月発行、321ページ、2200円+税)

●—————石坂 昭雄

現在、社会組織化の絶対的基盤であった国民国家の地位が大きく揺らいでおり、それに対して一方で市場や国際制度などの超国家的空間、他方でこれまで国民国家のなかのサブユニット

とされてきた《地域》の役割や意義が大きく増大している。こうした《国際統合》と他方での《地域化》の研究のうえで絶好の素材を提供してくれるのが、いまや中東欧にも及ぶ27カ国にま

で拡大している EU であろう。

本書は、これまでも、EU 社会における少数民族＝言語地域の問題や移民の問題を中心に多くの共同研究を主導してきた宮島氏をリーダーとする、ヨーロッパ諸社会の《地域》を基盤とする社会再編についての共同研究で、今日の様々の地域やテーマを扱った以下の13編からなっている。①「序章——ヨーロッパにおける地域の創出、再編と地域問題のゆくえ」(宮島喬)、I. 理論的接近 ②「グローバル化する社会における主体としての《地域》」(定松 文) ③「《領域性 (territoriality)》概念の再検討——近代国民国家の変容と連邦制的改革の中で」(伊藤 武) II. 国民国家への問題提起 ④「フランス共和制の変容——地方分権改革、地域民主・近隣民主主義立法の意味するもの」(中野裕二) ⑤「自治州国家スペインにおける《歴史的諸法》——地域自治に対する歴史的独自性の射程」(萩尾 生) ⑥「橋はまた架かるか——紛争後ボスニアの分裂と再建」(百瀬亮司) III. アイデンティティの境界 ⑦「新しい場所と土地の記憶——イングランドにおける国内移住者と土地の結びつき」(三枝憲太郎) ⑧「シティズンシップとマイノリティ——エストニアにおけるロシア語系住民の法的地位と帰属意識」(小森宏美) ⑨「北アイルランドにおけるコミュニティの重層化と多様化」(新城文絵) IV. 地域の再編と創出 ⑩「ケルト語圏における地域的言語文化の振興」(原 聖) ⑪「ユーロリージョンの《限界》——ポーランド西部国境領域を事例として」(仙石 学) ⑫「越境労働と国民国家——アルザス地域の《フロンタリエ》からみた EU 統合問題」(鶴牧泉子) ⑬「ローカルガヴァナンスの台頭と調整——イギリスにおける都市部の再生戦略」(若松邦弘)

これらの論文が扱っている多様なテーマや地域はそれぞれに興味不尽きないし、注も、現在

の研究状況や参考文献を知るにも極めて便利であるが、紙幅の関係で全てに立ち入って紹介することはできないので、紹介者から見て特に重要と思われるテーマに限って言及したい。この目次からもわかるように、本論文集では、従来たびたび取り上げられてきた少数言語地域よりも、むしろ一国内の地域 region の創出と自治拡大＝分権化の問題が議論され、また地域とは何かについての理論的整理がなされている。とりわけ、③④⑤で扱われている、長い間中央集権制を取ってきたスペイン、イタリア、フランスなどでの分権化と地域自治、とりわけイタリアのシチリアやサルデーニャ自治州などの事例、あるいはスペインの、カタルーニアやバスクなどの少数民族の歴史的自治州のみならず、広く自治州制度全般は、わが国での今後の沖縄も含めた道州制化の議論にも良い参考例を提供してくれよう。さらにこうした「地域」のずっと下方に位置する、市町村レベルの地域再生をイギリスの事例で扱ったのが⑧と⑬である。この外、新たに EU のメンバーとなったバルト三国での残留ロシア語系住民の処遇問題を扱った⑧、旧ユーゴ解体後の最大の紛争地域ボスニアの内戦から和平と再建を扱う⑥、これも名うての民族＝宗教的対立地域であった北アイルランドの新しいコミュニティへ向けての住民の意識の動きを論じた⑨なども非常に興味深い。

なお、EU 内で盛んに計画・組織されている国境を挟んでの経済協力、Euregio、Interreg の成果と問題点については、本書では⑩がドイツとポーランドの国境の事例を扱っているが、併せて、同時期に刊行された若森章考／八木紀一郎／清水耕一／長尾伸一編著『EU 統合の地域的次元——クロスボーダー・コーオペレーションの最前線——』(ミネルヴァ書房、2007年11月)を参照されたい。